



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	犬飼哲夫のブラキストン資料
Author(s)	加藤, 克; 市川, 秀雄
Citation	北大植物園研究紀要, 5, 1-21
Issue Date	2005-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32879
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p1-21.pdf



犬飼哲夫のブラキストン資料

加藤 克¹・市川 秀雄¹

はじめに

北海道大学植物園博物館¹に所蔵されているブラキストン採集鳥類標本の悉皆調査を通じて、その採集状況およびブラキストン・福士成豊による開拓使函館博物場²への移管、函館博物場から分散した標本群が現在の北海道大学にまとめられるまでの経過について、筆者らは検証したことがある(加藤・市川 2002)。その中で、函館から分散した後の標本保管機関が、①函館中学校、札幌中学校、北海道師範学校、②函館中学校、札幌中学校、札幌農学校の二説存在することを提示し、そのいずれもが必ずしも正しいものではなく、二説に現れる四機関それぞれに一時的に所蔵されていたことを明らかとした。これまで、ブラキストンにかかわる文献の多くは、上記二説のうち②説を採っている(市立函館博物館 1979、北島 1985、彌永 1979、関 1991 など)が、これらの記述は、それぞれに記載されている資料点数から、犬飼哲夫の報告(Inukai 1932、犬飼 1943)に基づいているものと考えられる。犬飼の報告はブラキストン標本に関する基礎情報ともいうべきものであるが、犬飼がその情報源となる資史料を明確にしていなかったため、なぜ②説を採ったのかを明らかとすることはできなかった。また、犬飼の記述には、開拓使に寄贈された標本の一部が1881(明治14)年に新装なった開拓使の札幌博物場(現在の北大植物園博物館本館)へと移管されたという、ほかの文献のいずれもが触れることのない記述もある。この件についても、これまで知られている資料や現存する標本から裏付けることができないため、検証が困難であった。

今回、北海道大学農学研究科に保管されていた犬飼哲夫の資料を北大植物園博物館に移管することとなり、その整理の中で犬飼が利用していたと考えられるブラキストン関係資料を発見した。これにより、上記の問題について検討することが可能となったので、ここに資料紹介を兼ねて報告するものである。

1. ブラキストン二十年祭

以下に紹介する犬飼哲夫の資料の大部分は、1911(明治44)年に市立函館図書館主催で行われた「ブラキストン歿後二十年祭」(以下、二十年祭と表記する)に関わるものである。検証を行う上で欠くことのできない部分であるので、まずここで二十年祭について確認しておくこととしたい。

二十年祭について詳細に触れた報告は、管見の限り彌永(1979)によるものが唯一である。やや長文になるが、引用することとしたい。(写真1・2参照)

明治四十三(1910)年、函館図書館主事岡田健蔵が、同館の組織変更の件で上京の折、内務当局からブラキストンを顕彰する案が出され、同館の事業として「ブラキストン二十年祭」が計画されたのである。

翌年八月八日、弥生小学校に、北海道の文化に貢献したブラキストンの功績に感謝する多くの人々が集まって、「ブラキストン函館渡来五十年ならびに歿後二十年祭」が盛大に行われた。会場の正面には日英両国旗が交差し立てられ、その下に白布をかけたブラキストンの塑像(東京美術学校石川確治制作)が安置され、演壇の右方の卓にブラキストンの遺品が陳列された。(陳列品略)

来賓の主なる人々は英国領事ロイズ氏、英国人スコット氏、河毛支庁長、北守区長、佐藤郵便局長、岡本会議所会長、中学校・女学校・商業学校・商船学校・小学校の各校長、図書館員全員などをはじめ、一般の参加者も六百名に達した。開会の辞につぎ英国領事による塑像の除幕を満場の拍手で迎え、花束を献じ、式辞の朗読と続いた。そのあと、ブラキストンと親交のあった佐藤郵便局長、東北帝国大学八田三郎氏、東京地学協会の佐藤伝蔵氏などの講演もあり、非常に盛大であったという。

¹ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館



写真1 二十年祭の様子



写真2 二十年祭出席者 前列右より佐藤伝蔵、八田三郎、平出喜三郎、岡田健蔵、瀬尾雄三、河毛三郎、工藤忠平

彌永は、この報告を「記念祭を報じた各新聞社の記事によった³⁾」とする。しかし、この表現は必ずしも妥当なものではない。彌永による二十年祭の情報は、当時の新聞記事全てに基づいているわけではなく、市立函館図書館に所蔵されている「ブラキストン廿年祭関連資料⁴⁾」(以下、「廿年祭関連資料」と表記)に貼り付けられている新聞記事の切り抜きにのみ基づいているものと考えられ、後述するようにその情報が不十分であることは否めないからである。

「廿年祭関連資料」は、市立函館博物館における特別展示(市立函館博物館 1991)などにも出品されており、比較的知られている資料ではあるが、改めて紹介しておきたい。この資料には、新聞記事が 33 件貼り付けられており、一部には新聞名、年月日が記されているもの、新聞の日付部分が貼り付けられているものがある。ただし、記載された日付が誤っていたり、同日の記事であるにもかかわらず、写真と本文が別々の頁に貼り付けられていたり、日付の順に貼り付けられていないこともあることから、利用については注意が必要な資料である。さらに、「廿年祭関連資料」は当時の関連新聞記事全てを網羅しているわけではなく、これのみに基づいて二十年祭の実態を描くべきではない。犬飼哲夫のブラキストン関係資料はこの「廿年祭関係資料」に不足している部分を全て埋めてくれるわけではないが、かなりの部分について情報を追加してくれるものである。以下、犬飼資料を紹介しつつ、検討を続けたい。

2. 犬飼哲夫のブラキストン資料

犬飼はブラキストンについていくつかの報文を発表している。その根拠となった資料は「ブラキストンの伝記に就いては、恩師八田三郎先生が在職中に多くの材料を蒐集し、そのまゝ私がこれを継承し、その後養父河野常吉氏の援助を得、更に函館図書館長岡田健蔵氏の非常なる御援助により、永年に亘り漸く完成した」(犬飼 1943)、「故八田三郎博士、函館図書館長故岡田健蔵氏、北海道史編纂の故河野常吉氏から受けついだものと、若干の自ら探しもとめたものによった」(犬飼 1988)といい、それがどのようなものであるのかについては明確にしていない。旧稿(加藤・市川 2002)では、八田由来のものは不明、河野由来のものは『博物一武』(稿本、犬飼哲夫旧蔵)かとしたが、実見する機会がなく詳細は不明とした。岡田由来のものは、現在市立函館図書館に所蔵されているブラキストンの書簡や「廿年祭関係資料」と考えていた。今回発見した資料がこれらに該当するものか否か、まず検討し、その内容がこれまで知られていないものについてはここに紹介することとしたい。

犬飼哲夫資料中に、ブラキストン関連の資料は 4 件含まれていた。1 件目は「ブラキストン記事 1 八田先生より賜はる」、「ブラキストン記事 2 八田先生より賜はる」と表に記された 2 枚の厚紙に貼られた新聞切抜きと、そこに挟まれていた資料、および「ブラキストン傳 八田先生より賜はる」と記された厚紙とそこに挟まれた資料が一枚の封筒(「ブラキストン、博物館」の記載あり)に入れられていたものである。2 件目は冒頭に「ブラキストン氏二十年記念會(函館図書館主催)」と記された資料、3 件目は大量の写真資料中の乾板およびプリントである。4 件目はブラキストンが横浜の新聞社『Japan Gazette』に連載していた「Japan in Yezo」の写真複写印刷である。これらがもともととは一つのものであったのか、最初から犬飼が別々に保管していたものであるのかについては、すでに定かではなくなっている。それぞれについて紹介・検討してみたい。

(1) 資料 1-1 「ブラキストン記事 1 八田先生より賜はる」の記載のある厚紙

この厚紙には、新聞記事が 3 件貼られている。全て「ブラキストン氏廿年祭挙行の議」の連載記事である。これらの脇には「函毎 四十四年一月五日、九一六九号」、「八日、九一七二号」、「十日、九一七四号」と書き込みがあり、『函館毎日新聞』(以下『函毎』と略記)の記事であることが確認できる。これらは「廿年祭関連資料」に含まれている記事である。

(2) 資料 1-2 「ブラキストン記事 2 八田先生より賜はる」の記載のある厚紙

この厚紙には、新聞記事が 4 件貼られている。うち 3 件は「北海道とブラキストン」の連載記事⁵⁾、1 件は前述「ブ

「ライキストン氏廿年祭舉行の議」の第4回目の記事である(「十一日、九一七五号」の書き込みあり)。これらも「廿年祭関連資料」に全て含まれている。

(3)資料 1-3 ブラキストン二十年記念會出陳遺物目録(写真 3)

本資料は、二十年祭が行われた 1911 年 8 月 8 日に函館図書館が配布したものである⁶。前述したように、二十年祭について述べられた報告は彌永のものが最も詳細なものである。前章では、彌永が紹介した二十年祭出品物については省略したが、犬飼資料に含まれていた遺物目録には彌永が取り上げていない関連資料が掲載されており、当時の状況をより詳細に知ることができる。それぞれについて検証してみたい。

以下の表は彌永記述の出品物一覧、および「廿年祭関係資料」の中に含まれる新聞記事(『函毎』1911 年 8 月 5 日付記事)の出品予定品である。それぞれの配列にしたがって表にまとめた。

彌永(1979)の出品物一覧	『函毎』記事
○英国人スコット氏出品 一 二連発銃(ロンドン製、北海道に於いて鳥類採取に使用したる銃である) 一挺 一 小銃弾筒 二個 一 採集箱 一個 一 望遠鏡 一個 一 鞭 一個 一 ブラキストン所有船の油絵 一枚 ○帝大動物学教室波江元吉氏出品 一 英文雑誌「菊」抜粋附録共 一部 一 英文亜細亜協会報告論文(「日本古代に於ける動物学上より見たる大陸との関係」と題し、著者自筆校正付) 一部 一 英文信書(ブラキストンより明治十五年三月二十七日付波江氏宛) 一部 ○林忠三郎氏出品 一 白磁製釣ランプ(ブラキストン所蔵品) 一個 一 ステッキ 一本 一 借用証 一枚 ○函館中学校出品 一 ブラキストン鳥類目録(全訳文付) 一部	英人スコット氏出品 一、二連発銃 倫敦製 一個 数千羽の剥製標本の採集一に本銃に依れり 一、小銃弾筒 二個 一、採集囊 一個 一、望遠鏡 一個 一、鞭 一個 一、ブラツキストン氏所有船の圖油畫 一個 帝大動物学教室波江元吉氏出品 一、英文雑誌「菊」抜粋附録共 一部 千八百八十二年五月横濱出版にしてブラツキストン氏論文「北海道東南部の鳥類に就て」著者自筆の校正付き 一、英文亜細亜協会報告の抜粋 千八百八十三年五月発行による「日本古代に於る動物学上より見たる大陸との関係」と題するブラキストン氏の論文なり 一、英文信書 ブラキストン氏より明治十五年三月廿七日当時上野教育博物館員浪江元吉氏に送れるものなり 林忠三郎氏蔵品 一、白磁製釣ランプ 二個 ブラキストン氏蔵品 一、ステッキ 一、借用証 函館中学校 一、ブラキストン鳥類目録 一個

一 石斧(ブラキストンが谷地頭公園付近で発掘したもので稀に見るほど大きいものである) 一個 ○豊奏號氏出品 一 アイヌ絵図(平沢屏山がブラキストン宅に於いて酒を飲みつつ画いた二枚) 二枚 ー現在二枚とも市立函館図書館蔵ー ○函館図書館出品 一 亜細亜協會報告(この論文によってブラキストンラインの名称が付けられた) 一部	一、全譯文 一、石斧 ブラキストン氏が谷地頭公園付近に於て一個採集したるものにして大なること稀に見る所なり 豊奏號氏出品 一、アイヌの圖 此圖はアイヌ畫の名手平澤屏山字名繪馬屋の筆にしてブラキストン氏が一枚百圓宛の潤筆料にて二枚揮毫せしめたるものなり當時毎日酒を飲みつゝ船場町のブラキストン氏の宅にて筆を取れり 函館図書館蔵品 一、亜細亜會報告 明治十六年四月發行此報告に依りてブラキストンラインの名稱を附せらるゝに至りたるものなり
--	---

微妙に表記が異なっているが、配列からみても彌永が記した出品物は、この記事が根拠となっていることは明らかである。しかし、新聞記事には「武氏記念會出品目録(一)」とあることに留意する必要がある。「廿年祭関係資料」に含まれていない『函毎』1911年8月7日付には、次の記事がある。

▲記念會出品 其後の分左の如し

▲富士成豊氏出品

一、揚子江探検測量報文 一冊

右はブラツキストン氏の探検せる揚子江流域の測量報文にしてこれを英國皇立地理學會に報告したるがためローヤルメダルを受領せり

一、蝦夷島旅行記

右はブラツキストン氏か本道最初に調査を報したる英國地理學會におけるブ氏の演説原稿を印刷に附したるものなり

自千八百六十二年至千八百八十二年之蝦夷旅行記 一冊

横濱ジャパンガゼット社千八百八十三年出版にかゝるブラツキストン氏の旅行記なり

一、日本東北旅行記

明治八年米國船アリエル號東京より歸函の際磐城相馬に難破しブラツキストン氏陸行青森に達したる旅行記なり

△平山常太郎氏出品(札幌中學校教諭)

一、津軽海峡の南北に於ける動物の分布及ブラツキストン線の由来

参照理學界 七卷十一号

一、トーマスライトブラツキストン氏傳記 一冊

原著より謄寫

一、全譯文

右二書は米國紐育北米合衆國立博物館長ステイネゲル博士の原述にして西曆千八百九十二年一月出版雑誌ワーク誌より抄出せらるものなり

ここにみるように、「廿年祭関係資料」のみからでは知り得ない出品物が存在しているのであり、「廿年祭関係資料」

のみをもって、二十年祭の全容を語ることに慎重であらねばならないのである。次に、犬飼資料中の「出陳遺物目録」を確認してみたい。上述したように、本資料は二十年祭の当日に主催者である函館図書館が配布したものであり、かつ上記新聞記事に記載のない出品物も含まれているものである。

石膏胸像写真「ブラッキストン先生二十年記念會」

ブラッキストン二十年記念會出陳遺物目録

△圖書繪畫

○著書

●The yang=Tsze 福士成豊氏(藏)

倫敦出版 千八百六十二年出版千八百六十一年揚子江流域ノ探檢並ニ測量調査報告書ブ氏此報告ニ依リ英國皇立地理學協會ヨリローヤルメタルヲ授與セラレタリ

●Journey in Yezo 福士成豊氏(藏)

倫敦出版 千八百七十二年二月十二日英國皇立地理學協會ニ於テ講演シタル舊蝦夷島即チ北海道旅行談ヲ印刷ニ附セルナリ

此旅行ハ千八百六十九年九月十五日所有帆船商人(アキンド)丸ニ乗ジテ其行ニ上リ全十一月二十九日マデニヶ月半ノ日数ヲ以テ旅行セル巡遊記ナリ自筆ノ校正追加アリ

●Japav in Yezo 福士成豊氏(藏)

横濱出版 千八百八十三年

本編ハジャパンガゼット紙上ニ千八百八十三年二月ヨリ十月ニ亘リテ記載セルヲ此時ニ於テ再版ニ附セルナリ

●A journey in North-east Japan

福士成豊氏(藏)

横濱出版亞細亞協會報告掲載

日本東北部ノ旅行記ニシテブラッキストン氏が亞細亞協會ニ於テ千八百七十四年六月十七日演説シタルモノナリ平山札中教諭ノ謄寫ヲモ添列フ

●Birds of Japan 函館中学學校(藏)

横浜出版一八八二年帝國大學教授プライカ氏ト共ニ編纂シタル鳥類目録ニテ三百二十五種ヲ載録ス亞細亞協會報告ニ分載セシヲ合綴シタルモノニシテ此書ハ前ニ函館博物館ニ藏セシガ標本ト共ニ函館中學校ニ移シタルナリ

●Zoological Indications, of Ancient Connection of The Japan Islands With The Continent. 東京帝國大學波江元吉氏(藏)

横濱出版 千八百八十八年發行ニ係ル亞細亞協會報告十一卷一號ニ掲載セルヲ拔萃セルモノニシテ故ブ氏自記校正追加アリ

●Transactions The Asiatic Society of Japan Vol.xi Part.I.

函館圖書館(藏)

明治十六年四月發行ニシテ此報告ニ掲載セル論文ニ依テ津輕海峡ガ動物分界上ブラッキストン線ト命名セラルハニ至レリ

●Ornithological Notes 東京帝國大學 波江元吉氏(藏)

横濱出版英文雜誌Chrysanthemum所載ノ拔萃ナリ校正ハ故ブ氏ノ自筆ナリー九八二年ノ發行ニ係ル本論文ニ關スル引用書ノ拔萃ヲ附録トセリ

●日本禽鳥集 函館中学學校(藏)

ブ氏ノ著 Birds of Japan ヲ開拓使屬野口源之助ノ和譯セルモノニシテ元函館博物館ノ藏品タリシナリ

●傳記評傳

●Life of Captain Thomas Wright Blakiston. 平山常太郎氏(藏)

北米紐育國立博物館長博士ステー子ケル氏ノ述ベタルヲ千八百九十二年一月刊行英文雜誌 The Auk. Vol.Ix. No.1.ニ載セタルヲ平山常太郎氏ノ謄寫セルモノナリ

●和譯ブラキストン氏傳記

前文ヲ札中教諭平山常太郎氏ノ譯セルモノナリ

平山常太郎氏(藏)

●進化論講話 丘淺次郎氏(著)

ブラキストン線ノ解説ヲ載セタリ

●動物学雑誌 箕佐博士記念號

八田三郎氏ノ動物分布上北海道ノ位置ノ記事ニブラキストン線ヲ説明セリ

●新日本 四十四年八月號

八田三郎氏ノブ氏ニ關スル談ヲ載セタリ

●理學界 四十三年五月五日發行號、四十四年六月一日發行號

平山教諭農學士志賀重昂氏記述ノ記事ヲ載ス

●新公論 四十三年十一月号

東京高等師範學校教諭理學士岩川友太郎氏論文「動物ノ分布ヨリ見タル兩海峡」ヲ記載セリ

●北斗 四十四年八月三日發行號

寫眞並ニ志賀重昂氏ノ記事ヲ載セタリ

●中學世界 四十四年八月號

桑原雪晏氏ノ「蝦夷島ノ探檢家」ナル記事ヲ載セリ

●譯文日本北海道案内記

明治二十六年六月函館出版ニシテ長岡照止氏ノ譯ニシテ發行人ハ平田文右衛門氏ナリ原著ハ千八百九十二年一月ジョンパチエラー氏ノ記事ニシテ函館博物館所藏ノ標本並ビニブラキストン線ノ説明アリ

●函館區史 四十四年七月十五日發行

ブラッキストン氏ニ關スル鳥類標本寄贈其他ノ記事ヲ載セタリ

●世界寫眞帖

農學士志賀重昂氏ノ著ニシテブ氏ノ寫眞及ビ記事ヲ掲グ

○筆蹟

ブ氏ヨリ上野教育博物館波江元吉氏ニ宛テタル十五年七月二十七日ノ通信ナリ⁷

○書面 自千八百六十三年至千八百八十三年

函館奉行所時代ノ文書ニシテ函館支廳ニ保存セラル、モノナリ

○寫眞

○ブラキストン先生ノ寫眞 一葉

ブ氏最初ノ撮影ニシテ又最後ノモノナリブ氏死去ノ一ヶ月前ニ福士成豐氏宛ニ寄贈セルモノナリ

○ブ氏ノ故宅

元船場町ニ建築セルヲ後チ汐見町ニ移セリ今尚ホ存リ在セ⁷

○油畫 英人スコット氏(藏)

ブラッキストン氏所有船ノ圖

○アイヌノ圖 豊大號氏(藏)

平澤屏山字名繪馬屋ノブ氏ノ故宅ニ在ツテ筆ヲ採レルモノニシテブラッキストン氏ノ所有セシモノナリ

○雜品

○二連發鐵砲 壹個

○小銃彈筒 二個

○採集囊 壹個

三品トモブ氏平生ノ事業タル標本採集ニ用ヒタルモノニシテスコット氏ノ藏品ナリ

○石斧 一名雷斧石 一個

函館中學校ノ藏品ニシテブ氏谷地頭ニ於テ採集セルモノ長サ壹尺三寸巾二寸八分厚サ一寸稀有ノ珍品ナリ

○鞭 一本

○望遠鏡 一個

二品トモスコット氏ノ藏品ナリ

○白磁製釣ランプ 二個

○ステッキ 一本

○借用証

林忠太郎氏ノ藏品ナリ

謹告

甲比丹ブラッキストン先生ノ偉徳ヲ追彰セン為メ今日茲ニ二十年記念會ヲ開催スルニ當リ本館ハ尚ホ一層氏ガ事蹟ヲ永久ニ傳ヘン為館内ニブラッキストン氏記念文庫ヲ創設スベク之レガ方法ハ追テ發表スベキモ来ル可キブ氏ノ二十五年記念會ヲ期シテ之レヲ完成セントスルモノナリ

函館圖書館

明治四十四年八月八日

ブラッキストン記念會ノ日

『函每』では二日分の記事をあわせて 23 件の出品資料を知るのみであったが、この「出陳遺物目録」により、新聞記事では知り得ない雑誌類などの出品資料をあわせて 36 件が出品されていたことを知り得る。新聞記事に比べ、書誌情報も詳細であることで更なる資料の確認が容易となることも、本資料の特徴といえよう。

以上のように、この「出陳遺物目録」は二十年祭の状況を知るための基礎資料といえ、かつ当時までのブラキストン関連資料の一覧を知ることができる資料といえる。なお、この「出陳遺物目録」は、これまで紹介されることがなかったが、北海道大学附属図書館北方資料室にも所蔵されており、これには一緒に配布された絵葉書二枚も付属している。

(4)資料 1-4 ブライキストン氏廿年祭舉行の儀ほか(写真 4)

本資料は、19.5×27cm、15 頁の印刷物であり、同じものが 4 部ある。タイトルの「儀」の字が異なっているものの、上記(1)(2)に貼り付けられた新聞記事を書き起こしたものである。

(5)資料 1-5 「動物地理学上に於ける津軽海峡 附ブラストン氏」 平山常太郎著(写真 5)

本資料は、22×16cm の原稿用紙 17 枚に記されたものである。著者の平山常太郎は「出陳遺物目録」に見るように、札幌中学校の教諭で、二十年祭に際してはいくつかの資料を出品している。また、『函每』に八田三郎らと共に「學者の眼に映せるブ氏の面影」記事に寄稿し、更に二十年祭当日には頌辭を述べてもいる。平山は、上記新聞記事中で、東京在住時より 10 年にわたってブラキストンの経歴を調査し、1907 年 11 月の札幌中学校赴任より 4 年をかけてようやく『理學界』に投稿したと述べている。

犬飼資料に含まれていた原稿は、『理學界』に掲載されている「動物分布上に於ける津軽海峡(フレキソン氏の経歴)」と内容は基本的に同じものであるが、文章はかなり異なる。この二つの報告について、検討することとしたい。

まず、犬飼資料に含まれていた原稿を記した人物は、平山本人であると考えられる。先に、「出陳資料目録」が絵葉



写真3 資料1-3 二十年祭出席者に配布された遺物目録

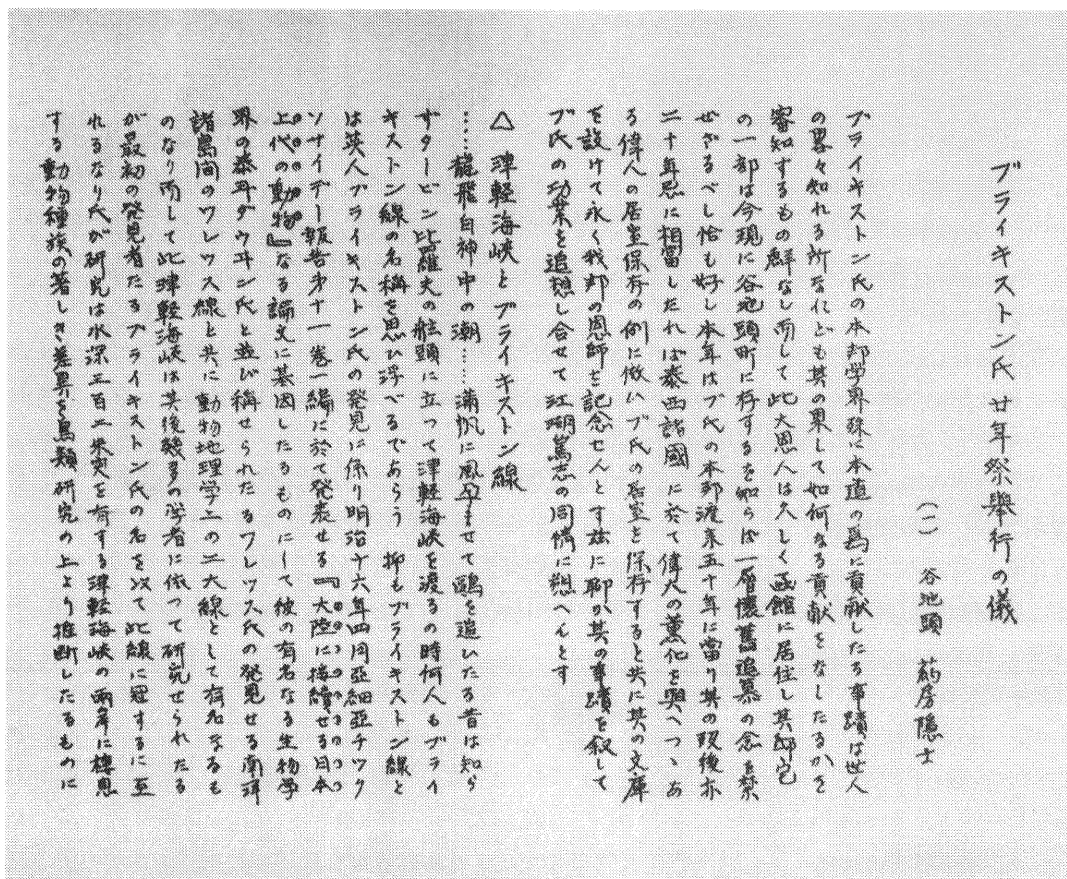


写真4 資料1-4 ブライキストン氏廿年祭挙行之儀

書二枚と共に北大附属図書館北方資料室に所蔵されていると述べたが、この絵葉書の袋には、「明治四十四年八月八日、於函館 故武氏武拾年紀念會ニ加入 紀念トシテ 平山生」という書き込みがある。この書き込みの「平山」および「於」という字の特徴が、原稿のそれと極似しているのである(写真6・7)。次に、原稿の文末には、「明治四拾三年一月稿」という記載がある。これに対して、『理學界』該当号は同年5月5日に発行されており、厳密な前後関係を判断することは難しいが、おそらく犬飼資料がより古い状態を示すものであろう。このような投稿前の原稿がなぜ、犬飼の手元にあるのだろうか。根拠となる材料は乏しいが、犬飼資料の原稿中にはない「澳国大学教授シェーエス氏の説」が『理學界』論文には引用されていること、ブラキストンの論文名が犬飼資料では「zoological indication of ancient connecte of Japan island with the continents」となっているのに対し、『理學界』では「Zoological indication of Ancient Connection of the Japan island with the Continent」と修正⁸されていることなどから、平山が八田に対して、助言を求めた際の原稿と考えることはできないであろうか⁹。

詳細は不明とせざるをえないが、本資料は八田の収集によるものであると推測される。

(6)資料 1-6 柳田藤吉経歴(写真 8)

本資料は、北海道庁の野紙3枚にペンで記されたものである。これは『北海道史人名字彙』(河野 1979)に含まれる柳田藤吉の事跡と全く同じ内容である。『北海道史人名字彙』は、1918(大正 7)年刊行予定であった『北海道史』の一部として、河野常吉によって編集されたものであり、さまざまな問題から刊行されないまま原稿が北海道庁と河野宅に保管されていたものである¹⁰。犬飼が初めてブラキストンについて紹介した報告(Inukai 1932)に柳田についての記述があり、この時点では『北海道史人名字彙』は刊行されていなかったこと、用紙が北海道庁のものであることなどから、犬飼が義父である河野常吉から受け継いだという資料はこの「柳田藤吉経歴」であると考えられる。ただし、犬飼が記した柳田に関する記述は、この経歴だけでは不十分で、市立函館図書館に所蔵される「経歴談¹¹」を利用していることは明らかである。

(7)資料 1-7 「ブラキストン記念會に於て 津軽海峡以北の動物観に就」(写真 9)

本資料は、函館図書館の野紙9枚に筆で記されたものである。資料そのものには、誰の講演の原稿であるかは記載がないが、「廿年祭関連資料」最終頁に貼り付けられている八田三郎の講演「動物園とブラキストン線¹²」とほぼ同じ内容であり、八田三郎の講演の内容であることがわかる。しかし、これがどのような性格のものであるかについては、さらに検討が必要である。

「廿年祭関連資料」所収新聞記事とは異なり、本資料冒頭には「ブラキストン氏の性格につきては曾て根室故柳田氏に聞き、其人物を想像して居りましたが、今佐藤氏の講話を聞き、其實話か私の想像と一致して居ることを頗る喜ぶものであります。さて、私の話は専門的にわたり抽象的にて判りにくく、随て面白味も少なき事と存じますが、いま少しく述べやうと思ふ」とある。きわめて口語調の表記であり、かつ函館図書館の野紙に記されていることから「廿年祭関連資料」の新聞記事のみを参考にした場合、八田三郎が講演を行った内容をそのまま筆写したものであるかのような印象を受ける。しかし、「廿年祭関連資料」に含まれていない『函毎』明治44年8月11日付記事に、本資料と全く同じ講演内容が掲載されており、この記事との関係を検討しなければならない。些細な字句の異同を除き、資料間の関係を見出せるものは以下の点である。

	『函毎』記事	犬飼資料
I	ブレキストン氏の眼を注がしめたのである。即ち此線が津軽海峡を」通ることを発見せしめたのである。	ブレキストン氏の眼を注がしめたのである即ち此線が津軽」海峡を通ることを発見せしめたる
II	此書の「亜細亜大陸に関するものを述べれば亜細」亜大陸の北部を三つに区分して居る	此書の亜細亜大陸 の に関するものを」述べれば亜細亜大陸の北部を三つに区分して居る

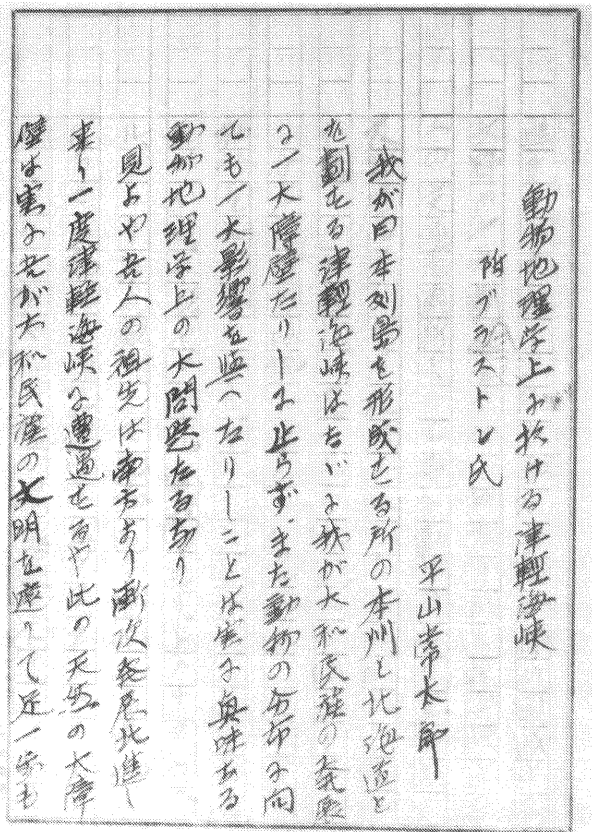


写真5 資料1-5 平山原稿



写真6 平山原稿の名前および「於」

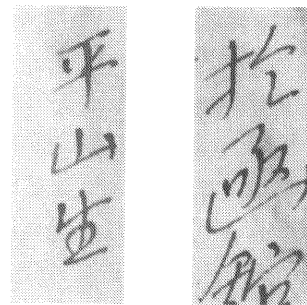


写真7 絵葉書袋の名前および「於」

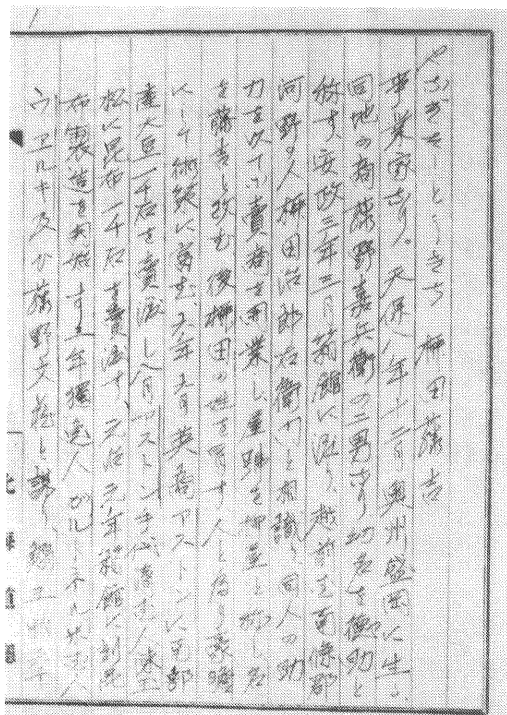


写真8 資料1-6 柳田藤吉経歴

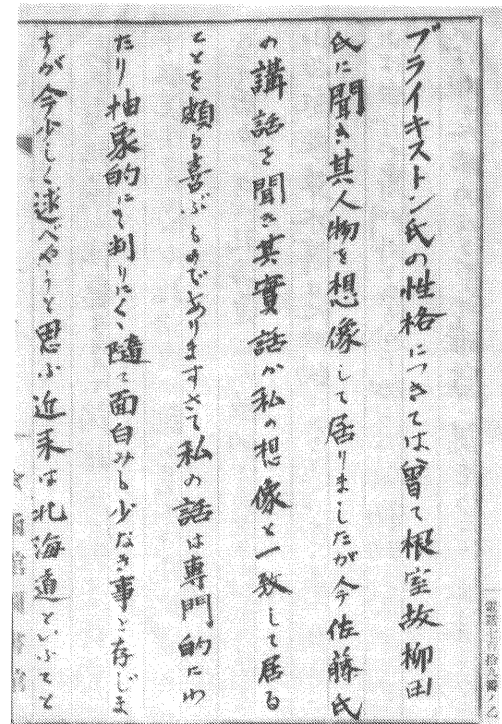


写真9 資料1-7 八田講演

Ⅲ	揚子江調査後は明瞭に知るを得なかったが『ダン氏の話に揚子江調査の』後に於て西比利亜を旅行して函館に來たし」との事なるが	揚子江調査(後)は明瞭に知るを得なかつたが『ダン氏の話に揚子江調査の後に(は)明瞭於て西比利亜を旅行して函館に來た《り》』しとの事なるが
---	---	--

」は改行場所。括弧の中の二重打ち消し文字は、括弧前の文字が打ち消された文字の上にあることを示す。ただし、犬飼資料Ⅰ例目の最終行の「め」は修正してあるようだが、下の文字は判読できない。二重山括弧は、挿入記号を用いて脇に記載があることを示す。

実際の改行状況で確認するとより詳細に判明するが、ここに挙げた相違点から次のことが確認できる。まず第Ⅰ例として挙げたものから、新聞記事を筆写する際に、次行の「発見せしめたる」につられて、「注がしめたる」と記載したものとなしうる。Ⅱ例目の「亜細亜大陸のに関する」も次行の「亜細亜大陸の北部」につられて、誤記したものであろう。Ⅲ例目はより明白で、前行の文章を誤記したものである。また、3例目の《り》の補記は新聞の表現の不足を補足したものと考えられる。これらのことから、函館図書館の野紙に記載されたこの八田三郎の講演内容は、『函毎』の記事の筆写であるとみなしうるのである。この資料が、犬飼が八田から譲り受けたものであるとするならば、八田が函館図書館から新聞掲載の講演内容を写したものを受け取ったものであろうし、犬飼自身が集めたものであるとするならば、函館図書館の岡田健蔵の協力を得たものであろう。ここで、改めてこの野紙を確認すると「電話七百拾九番ノ乙」という記載がある。市立函館図書館によれば、この電話番号は1910年時点で確認され、1918年には別の番号が利用されていたとのことである。この点からすれば、この野紙は犬飼哲夫の時代ではなく、八田三郎の時代に利用されていたものであり、この資料は八田から犬飼に譲り渡された資料であると位置づけられる。

(8)資料 1-8 「ブラキストン傳 八田先生より賜はる」の記載のある厚紙

この資料は、上記資料(1)(2)と同じサイズの厚紙である。裏面に、「Th.P. Riabonchinsky Expediton a Kamutchatka, Komarov, V.,L. Section de Botanique. Livraison 1.1912」と記された紙片が貼り付けられている。これは、1912年に出版された『Expedition a Kamtchatka, organisee par Th. P. Riabouchinsky avec le concours de la Societe Imperiale Russe de Geographie, section de botanique』を指しているものと考えられるが、ブラキストンに関わる記事は確認できなかった。

別の紙片に、「Mrs.T.W.Blakiston Free Hills, Bursledon South Haunts, England」という記載もある。八田三郎は、二十年祭出席に先立ち、次のようなコメントを発している。「小生先年来ブ氏の事蹟事業等詳細取調べ度存じ、諸方に手を廻し候もありふれたる材料の外手に入らず心外千万に御座候(中略)ブ氏の未亡人ロンドン市に孤棲されし趣につき、恰も其令兄ダン氏は小生の友人と親しき趣聞込み、ダン氏を介し未亡人に交渉いたし、其送り來たれる材料は只一編の小傳にて、小生等も有する所の米國スタインガー氏の編せしものに有之候¹³⁾。本資料に貼り付けられた紙片は、この新聞記事に見るブラキストン夫人の住所であろう。また、ブラキストン夫人から送られたという小傳は「出陳遺物目録」にみる「Life of Captain Thomas Wright Blakiston.¹⁴⁾」であると考えられ、本資料表紙に「ブラキストン傳」とあることから、スタインガーのブラキストン死亡記事(Stejneger 1892)が過去にこの厚紙に挟み込まれていたことが示唆される。犬飼自身もブラキストン小伝の中でスタインガーの記事を引用しており(Inukai 1932, p260 注)、八田から引き継いだと推察されるこの記事を利用していたことは間違いないが、現時点で犬飼資料の中にそれを見出すことはできない。

(9)資料 2 ブラキストン二十年祭 祝辞など(写真 10)

この資料は、22×28cm の用紙に印刷されたもので、上記八田資料とは別に、犬飼の資料に含まれていたものである。内容は、冒頭に「ブラキストン氏二十年紀念會(函館図書館主催)」とあり、図書館長平出喜三郎の式辞、英国領事の祝文、「ブ氏と動物園」と題した八田博士の講演の写しである。この内、式辞と英国領事の祝文は、『函毎』8月9日付記事(「廿年祭関連資料」所収)の写しである。「ブ氏と動物園」は、脱文や写し誤りの状況を『函毎』8月11日付記事と上述(7)「ブラキストン紀念會に於て 津軽海峡以北の動物觀に就」とを比較した結果、新聞記事を筆写したもので

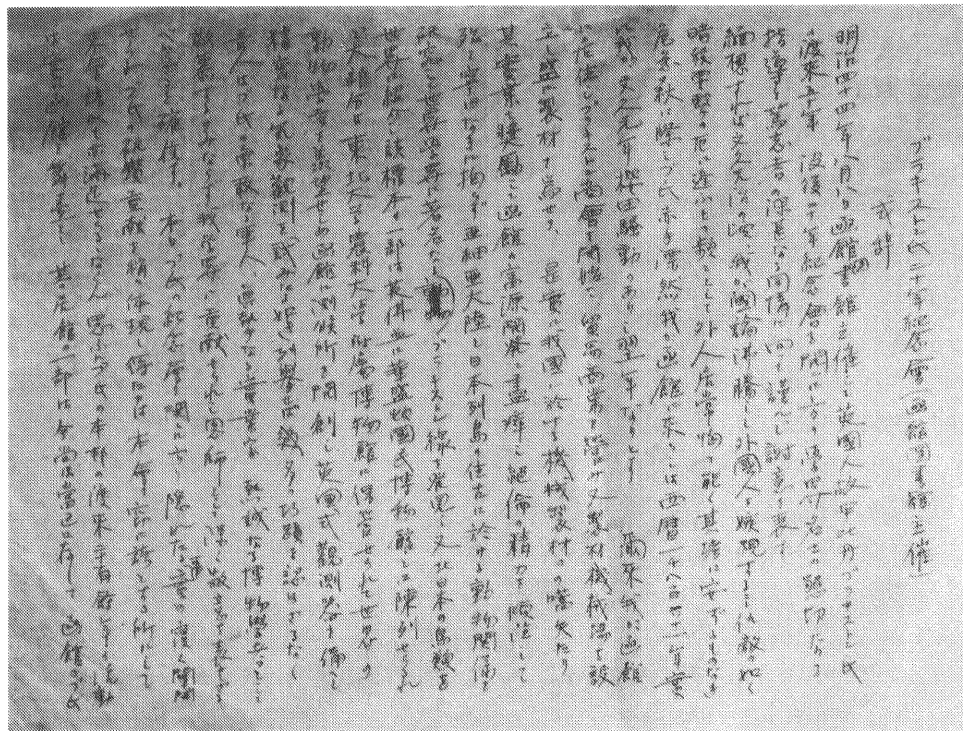


写真10 資料2 ブラキストン廿年祭祝辞など

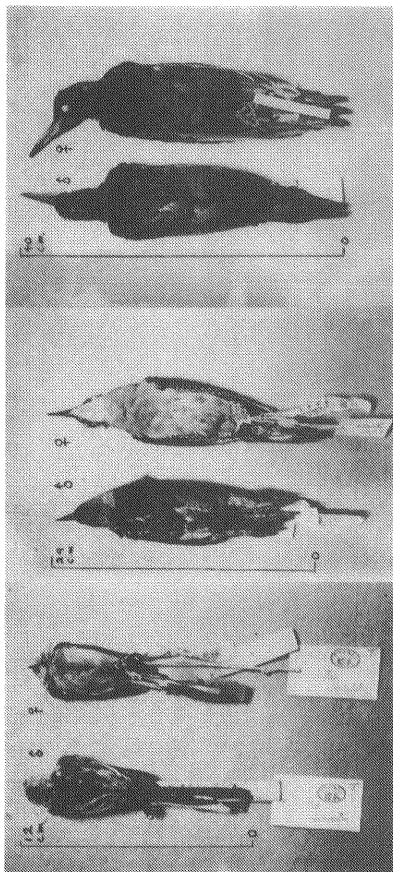


写真11 剥製写真



写真12 肖像写真



写真13 肖像写真

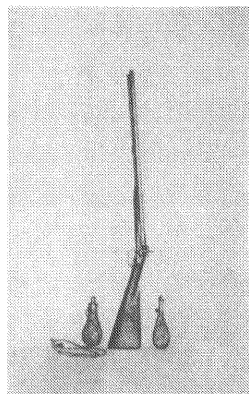


写真14 銃模写図写真

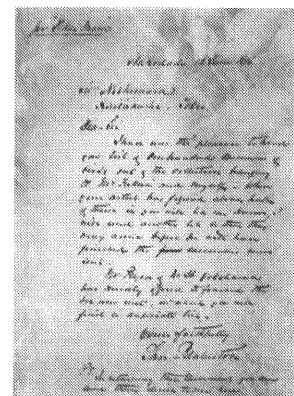


写真15 書簡写真

あるとみなしうる。

これらの新聞記事は、ここまで確認してきた八田三郎から犬飼哲夫に託された資料の中には含まれていないこと、資料自体が八田三郎から譲り受けた資料群とは別に保管されていた可能性が高いと考えられること、市立函館図書館の「廿年祭関係資料」から八田の講演記事が抜けていること、函館図書館の罫紙に写された八田の講演とは別系統で筆写されていることから、この新聞記事の写しは犬飼が独自に新聞記事を収集したものであると推察される。

(10)資料3 ブラキストン書簡・標本写真など

次に挙げる資料は、犬飼の遺品中に残された膨大な写真資料の中に含まれていたものである。

①ブラキストン標本剥製(クマゲラ・ヤマゲラ・シマエナガ)(写真 11)

②ブラキストン肖像(1)(写真 12)

③ブラキストン肖像(2)(写真 13)

④ブラキストン製作の標本棚

⑤ブラキストン愛用の銃の模写図(2種類)(写真 14)

⑥ブラキストン書簡(プリント)(写真 15)

⑦ブラキストン書簡(ガラス乾板)

⑧二十年祭の様子および二十年祭出席者(写真 1・2)

の8件が確認される。この内、①・②は山階芳麿・犬飼哲夫らによるブラキストン鳥類標本目録(1932)に掲載されているものである。目録に掲載されているもののうち、エゾライチョウ剥製写真は確認できていない。③は、市立函館図書館が所蔵する若い頃の肖像写真である。④は、ブラキストンの標本と共に北大植物園博物館に移管された標本棚で、函館時代ではなく、現在置かれている北大植物園博物館内で撮影されたものである。⑥は、北大附属図書館北方資料室所蔵外国人書簡、ブラキストン1(1876年6月12日付、西村貞陽宛)と同じものであり、別稿で紹介したものである(加藤 2003)。⑧は、「函館恵比寿町、池田」の台紙が利用されており、二十年祭当日に撮影されたものである。記念写真裏には、八田三郎ら被写体の名前があり、二十年祭の様子を写した写真にも紙が貼り付けられていたようであるが、こちらは破損しほとんど判読し得ない。

次に、同一の書簡を写した3枚のガラス乾板⑦がある(写真 16)。以下、全文を紹介する。

Sapporo 9 Nov 1881

To Sato Hideaki Esq.

Chief of Bussan-ka

Kaitakushi Dep Sapporo

Sir

Regarding the contemplating removal of the Collection of Bird-Skins presented by Mr. Fukushi and myself to the Hakodate Museum, to the new Museum at Sapporo, I have the honor to state, that having consulted with Mr. Fukushi, we consider the transfer desirable, and trust you will be able to carry out the arrangement.

You will please bear in mind, and give the necessary instructions accordingly, that the original conditions attaching to the collection and that it is to be will cared for to be kept for scientific reference, and under our control so far as exchanges or disposal of specimens.

I believe that this addition to the New Museum, will make it, in an ornithological way, the most complete in Japan at the present time.

Sapporo 9 Nov. 1881

To Sato / Hideaki Esq.
Chief of Bussan-Kai
Kaitakushi Dep^t - Sapporo

Sir

Regarding the contemplating removal of the Collection of Bird-Skins presented by Mr. Futkushi and myself to the Hakodate Museum, to the new Museum at Sapporo, I have the honor to state, that, having consulted with Mr. Futkushi, we consider the transfer desirable, and trust you will be able to carry out the arrangement.

You will please bear in mind, and give the necessary instructions accordingly, that the original conditions attaching to the collection are — that it is to be well cared for, — to be kept for scientific reference, — and under our control so far as exchanges or disposal of Specimens.

I believe that this addition to the New Museum, will make it, in an ornithological way, the most complete in Japan at the present time.

I have the honor to be
Sir
Your obed^{mt} serv^t
Thos Blackiston

写真16 ブラキストン書簡写真

I have the honor to be

Sir

Your obed^{nt} serv^t

Tho^s Blackiston

ブラキストンの残した書簡類は、市立函館図書館、北海道立文書館、北大附属図書館北方資料室に所蔵されているが、この書簡の原本はいずれにも保管されておらず、北方資料室にこの書簡の写真のみが保管されている。北方資料室所蔵写真の裏面に「北大附属博物館蔵、但しブラキストンの自筆なりや否やは疑問の点多し、Blakiston を Blackiston と記しなり、富士氏のことはブラキストンは Fukusi と普通書き居りしが、この書には Fukushi とあり」という記載があり、北大植物園博物館に保管されていた書簡であることがわかる。3枚のガラス乾板をみると、それぞれ露出が異なっているようで、罫線が確認できるものとできないものがあることから、この写真が撮影された時点で、書簡原本があったことが予想されるが、現時点で所在は確認できない。また、記述のようにブラキストンの書簡であるかどうかについても疑わしい部分があるが、後述するようにこの書簡に係る史料が存在し、内容的にも矛盾は存在しないので、この書簡は代筆されたものと考えたい。

内容を見てゆくと、この書簡が作成された1881年11月の時点で、新装された札幌博物場(現北大植物園博物館本館)に、函館博物場に所蔵されているブラキストンおよび福士成豊の鳥類標本を移管したいという働きかけがブラキストンに対してあり、ブラキストンも条件付きながら前向きな姿勢を見せていることがうかがわれる。この書簡の存在こそが、犬飼の「The collection was first kept in the small local museum in Hakodate and later some part was removed to the new museum in Sapporo 1881」(Inukai 1932)という記述につながるものである¹⁵。しかし、この書簡のみをもってすれば、犬飼以外に誰も述べていない函館博物場から札幌博物場への標本移管が1881年に行われたということはいえるかもしれないが、函館博物場の鳥類標本点数が1880年時点で1330点、1882年時点で1376点という記録¹⁶、および現存するブラキストンの標本を詳細に調べるならば、1881年に札幌への移管が行われたという形跡はなく(加藤・市川 2002)、検討が必要であろう。この点については後述することとしたい。

(11)資料4 「Japan in Yezo」

この資料は、『Japan Gazette』誌に連載されたブラキストンの北海道旅行記である。一部破損・補修されているが全頁揃っている複写資料である。上述の二十年祭・書簡資料とはまったく別の箱に収められていたものであり、関係性ははっきりしない。

この資料について検討すると、資料の本文8および9頁右脇に小さな「×」印があり、26～28頁にかけて英文の書き込みがある。これらの書き込みは、北大附属図書館北方資料室に所蔵されている「Japan in Yezo」にも確認されることから、犬飼本および北方資料室本は、共通の祖本を持つものであるといえる。この祖本は、北方資料室本の本文第1頁に押されている「函館図書館郷土資料」・「函館図書館蔵」という蔵書印によって、市立函館図書館所蔵資料であることが判明する。北方資料室によれば、当該資料は1978年ごろに所蔵登録されたもので、複写もこの時期に行われたものであるという。北方資料室本に確認される蔵書印が犬飼本には確認されないこと、北方資料室本では不鮮明な英語の書き込みが犬飼本では鮮明に確認されることから、犬飼本は函館図書館の祖本から直接複写したものであるとみなしうる。それでは、犬飼本はいつ頃複写されたものであろうか。

複写を行った人物として考えられるのは、八田三郎か犬飼哲夫である。八田が行ったとするならば、ブラキストンの鳥類標本が現在の北大植物園博物館にまとめられた1908年頃、または1911年の二十年祭の頃に行われたと見るべきであろう。犬飼が行ったとするならば、小伝を執筆した1932年以前、おそらく留学から帰国して博物館主任となった1930年から32年の間であると考えられる。

複写が行われた下限は、函館図書館の蔵書印が押された時点である。市立函館図書館によれば、「函館図書館郷土資料」印は、「郷土資料」という区分を行うようになった1928年(岡田健三による私立の図書館から資料が引き継がれ、市立函館図書館が開設された年)以降に押されたものであろうとのことであるが、1935年に刊行された郷土資料目録に

「Japan in Yezo」とともに掲載されている1932年発行のブラキストン鳥類標本目録および犬飼によるブラキストン小伝にもこの印が押されていること、1935年以降の受け入れであることが確認される資料群にも「函館図書館郷土資料」印が押されていることから、この印がいつからいつまで運用されていたのかは定かではない。仮に、市立函館図書館設立以前から郷土資料の収集に意欲を注いでいた岡田健蔵が郷土資料目録の作成に向け、1928年の市立図書館設立の時点から「函館図書館郷土資料」印を利用し始め、その時点で所蔵されていた「Japan in Yezo」に押したのであれば、犬飼が複写に関わった可能性は薄れるが、1935年の目録作成と同時期に押され始めたのであれば犬飼の利用した資料に蔵書印が押されていないとしても、時間的な矛盾は生じないことになる。このように、現時点で判明している蔵書印の情報からでは、犬飼旧蔵の「Japan in Yezo」がいつ、誰によって複写されたものであるかは明らかとはならない。

それでは、市立函館図書館所蔵「Japan in Yezo」がいつ頃から八田ないし犬飼が利用できる状況にあったのか、検討してみたい。函館図書館の郷土資料目録(1935)には、当該資料の注記として「書中函館在留英商ヘンソン氏の書入れあり」とある。これは上述した26～28頁にある英文書き込みである。ヘンソンは1892年ごろまで函館に滞在していた¹⁷と考えられ、ブラキストンの帰国後、代理人として委任を受けていた人物である。書入れからヘンソン旧蔵であるとするならば、古くに岡田健蔵の手元にあった可能性もあるが、確実なことはいえない。これに対して、函館図書館周辺には、もう1点の「Japan in Yezo」の存在が知られる。上記、二十年祭出陳遺物目録には、福士成豊出品の「Japan in Yezo」が掲載されており、同じく福士出品の「The yang=Tsze」(=「Five months on the Yang-Tsze」)が函館図書館郷土資料目録(1935)に掲載されていることを念頭に置くならば、二十年祭の後、福士から岡田のもとへ寄贈されたという可能性はないだろうか¹⁸。福士とブラキストンの関係を考えて場合、ヘンソンの書き込みがある理由を明快に説明しがたく、また二十年祭に福士が出品した他のブラキストン関連の著作などが函館図書館に所蔵されていないことなど課題は多いが、函館図書館本が福士成豊旧蔵であるとするならば、可能性の一として、八田がブラキストン標本を集めた1908年前後に、当時札幌在勤の福士の所蔵資料を複写した。可能性の二として、福士から函館図書館に寄贈され、蔵書印が押される前に八田ないし犬飼が複写したという二点を提示することができよう。

複写の技術的な面、複写の目的などまだまだ検討の余地は残されているが、本稿では上記のさまざまな可能性を提示するにとどめることとしたい。

3. 犬飼の記した標本分散先と標本移管について

3-1. 犬飼のブラキストン資料の由来

犬飼が所持していたブラキストン関係資料は前章にみた資料群である。これらこそが犬飼が「ブラキストンの伝記に就いては、恩師八田三郎先生が在職中に多くの材料を蒐集し、そのまゝ私がこれを継承し、その後養父河野常吉氏の援助を得、更に函館図書館長岡田健蔵氏の非常なる御援助により、永年に亘り漸く完成した」(犬飼 1943)と記した資料群であると推測される。前章の検討をもとに、整理してみたい。

まず、八田三郎から入手したと確認される資料は、新聞記事の切り抜き(資料 1-1、1-2)、実物は現時点で確認できないもののスタインネガーによるブラキストン伝およびブラキストン夫人の住所のメモ(資料 1-8)、二十年祭の「出陳遺物目録¹⁹」(資料 1-3)、「ブラキストン記念會に於て 津軽海峡以北の動物觀に就」(資料 1-7)、写真資料のうち、二十年祭当日に撮影されたものなどである。必ずしも明確にはならないが、平山常太郎著「動物地理学上に於ける津軽海峡」(資料 1-5)も八田が本人から譲り受けたものである可能性が高い。次に、河野常吉から入手したと考えられる資料は、「柳田藤吉経歴」である。函館図書館長岡田健蔵から入手したと確認できる資料は、写真資料に含まれるブラキストンの肖像写真(資料 3-2・3)およびブラキストン愛用の銃(資料 3-7)、「廿年祭関係資料」など函館図書館(のち一部市立函館博物館)所蔵資料、また、犬飼資料中には含まれていないが、柳田藤吉の「経歴談」も提供してもらったと考えられる。

犬飼自身が入手・整理したと考えられる資料は、八田から引き継いだ新聞記事の書き起こし(資料 1-4)、「廿年祭関

係資料」に含まれていない新聞記事の書き起こし(資料 2)、写真資料の一部(資料 3)といったところであろう。「Japan in Yezo」(資料 4)の複写時期は、必ずしも定かではなく、八田から受けついだものか、犬飼自身が集めたものであるかははっきりしない。写真として残されたブラキストンの書簡の原本は、標本移管を試みた札幌博物館に所蔵されていたものか、開拓使に残されていた書簡を何らかの形で八田か犬飼が集めたものかは定かではない。

これをもとに、旧稿では明確にしえなかった問題について、検討することとしたい。

3・2. ブラキストン標本の札幌博物館移管について

犬飼資料に含まれていたブラキストン書簡写真から確認されるごとく、札幌博物館側からの標本移管の働きかけがあり、ブラキストンもこれについて了承しており、1881年に新設された札幌博物館に函館博物館からブラキストン標本が一部移管されたという犬飼の記述は裏付けられることとなった。しかし、現存する標本の状況からは、それを裏付けることができないのも事実である。そこで、ブラキストンと札幌博物館との交渉に関わる史料を探すと、以下のものを見出すことができる。

博物館内剥製鳥類移轉義御見合願²⁰

当公園ノ儀ハ四時共ニ内外衆庶登觀来遊セル所以ノモノハ敢而奇樹美草称名香花ノ在ルヲヨリ娛樂ヲ是ニ目シテ来遊スル所以ノモノニアラス、其愛スルモノハ天然山海ノ風致ト併セテ園内博物館ノ設ケアリテ、金石木材鳥獸魚介技藝美術ノ物品ヲ陳列シテ學術上ノ参考トナルノ故ヲ以テ内外人ノ当道ニ渡来セルモノ貴賤ヲ問ハスシテ公園ニ来遊セルノ所以ナリ、然ルニ聞ク、此頃博物館内陳列セル鳥類剥製ヲ札幌博物館ニ移轉スヘシト、該鳥類ヲ館外ニ出スニ於テハ他ノ鑛石木材魚介獸類ノ数種在ト雖モ未タ蒐集ノ日浅シテ、陳列セルモノ僅々一類ニ二三過キズ、最モ陳列ニ多数ヲ得タル鳥類剥製ヲ除カハ、假令博物館ノ名アルモ寥寥、又来リ看ルモノ往日ノ比ニ非サルヘシ、然ラハ則当公園ノ風景トモニ来觀スルモノノ望ヲ幾分カ欠カスルハ實ニ遺憾ノ至ニ堪ヘス、加之該鳥類ハ当時札幌在勤福士成豊氏及ヒ当港在留ノ英人フライキストン氏ノ十數年間当道ノ深山幽谷海濱沼池ヲ跋涉シテ採集セルモノニシテ館内北海道動物中ノ一班ヲ粗完全ナラシメ稍觀ルヘキモノタリ、蓋シ福士氏ノ函館ニ生レテ此採集ニ意アルトフライキストン氏ノ当港ニ在留セル既ニ二拾有余年ノ久シキ殆ト本邦人ト同ス、又二氏ノ函館ニ因アル豈小々ナランヤ、故ニ函館博物館ニ二氏ノ採集セルモノヲ永ク保存シテ其宿志ヲ遂ケシメンコトヲ唯憾ム、場内狹隘ニシテ充分ノ陳列ニ至ラスト雖モ漸次該場ヲ建増ニ成ルヘキコトト儀セリ、故ニ私共過般フライキストン氏ニ接ステ該鳥類ヲ永ク当博物館ニ陳列ナシ學術上ノ為メ北海道へ来遊スルモノノ為メニ備置シコトヲ願セシニ、同氏はヲ認シテ既ニ福士氏ニ書翰ヲ差出セル由ニ付キ、何卒永ク当地博物館陳列ニ相成候様、札幌本廳へ乍恐至急御照會有之度此段公園世話係連署奉願候也、

明治十四年十二月廿五日

函館公園世話係

渡辺熊四郎

平塚時蔵

今井市右衛門

平田兵五郎

開拓大書記官時任為基殿

(傍線引用者)

ここに見るごとく、函館公園世話係として連署する函館の産業界の大物 4 名が開拓使に対して、移管差し止めを請願している。この請願書が提出されたのは、ブラキストンが開拓使からの札幌博物館移管に対しての返信を発した一月後のことであり、この両史料の関係は明白である。

渡辺ら 4 名は、開拓使に対して差し止めを請願するのみならず、ブラキストンとも交渉し、移管中止の同意を取り

付けていることが請願書から知られる。明治 14(1881)年末の段階で移管差し止めの請願が出されていることから、少なくとも犬飼が述べた 1881 年の移管はなかったものと考えられ、また翌年早々には開拓使が廃止されてしまうことから、移管そのものも行われなかったとみなしてよかろう。現存標本の状況から函館博物館より札幌博物館への移管が見出せない理由は、移管が行われなかったがゆえである。

犬飼が記した標本移管が 1881 年 11 月の段階で進行していたことは疑いようのない事実であるが、実際には行われなかったのであり、犬飼の記述が妥当ではないことが確認された。

3-3. ブラキストン標本の分散先について

最後に、ブラキストンが函館博物館へ寄贈した鳥類標本 1,300 点あまりが、現在の北大植物園博物館へと集められるまでに分散した先について、犬飼が函館中学校、札幌中学校、札幌農学校の三機関(②説)としたかについて、検討することとしたい。犬飼が利用した資料中に、標本分散先が記載されているものは、「廿年祭関係資料」所収新聞記事と平山常太郎による「動物地理学上に於ける津軽海峡 附ブラストン氏」(犬飼資料)である。また、岡田健蔵も 1931 年に②説について述べている(岡田 1931)。これらの全てが函館中学校、札幌中学校、札幌農学校が分散先であるとする。これらの情報をもとに犬飼は②説を採ったものであろう。犬飼が①説(札幌農学校ではなく北海道師範学校)について検証しなかった理由としては、以下の点が考えられる。第一に、犬飼の利用したブラキストン関係資料の全てが、北海道師範学校を分散先に入れていないこと、第二に、既に指摘されている問題ではあるが、山階芳麿・犬飼哲夫らが編集したブラキストン標本目録(1932)には、ブラキストン来日前、離日後の採集日情報が付属する標本が含まれている(北島 1985、北大植物園 2002、加藤・市川 2002)。これは、旧稿で述べたように、本来ブラキストンが付与したとは考えられないラベル(八田が付与したラベルで「ブラキストン標本」印が押されているもの)をブラキストン自筆のラベルと誤認して、それらが付属する標本を全てブラキストン寄贈標本に含んでしまったことによる。犬飼によるブラキストン小伝が合冊されているこの目録に、離日後の標本が含まれているということは、目録と小伝が別々に編纂され、犬飼が標本調査・目録編集にそれほど深く関わっていなかったという可能性を示唆するものである。そうであれば、犬飼が標本ラベル裏に「北師」という記載があることに気づかなかった可能性も高く、また、一部の標本(1900 年に函館中学校から先行して移管された 136 点)に付属する目に付く札幌農学校時代のラベルの存在とも合わせ、新聞記事の分散先に関わる記述が妥当なものであると考え執筆したと推察できる。旧稿では、「北師」を犬飼が札幌農学校と考えたという可能性も提示したが、そもそも犬飼が利用したと考えられる材料に、北海道師範学校という記述を行うための材料がなかったのだろう。以上、可能性の羅列にしか過ぎないが、犬飼が分散先を函館中学校、札幌中学校、札幌農学校(②説)であると記した背景についてまとめた²¹。

今後の混乱を避ける意味も込めて、ブラキストン標本の分散先は、函館中学校、札幌中学校、北海道師範学校、札幌農学校の四施設であるという点をあらためて強調しておきたい。

おわりに

犬飼哲夫旧蔵ブラキストン関連資料の整理を通じて、これまで検討しえなかった諸問題について、わずかではあるが明らかとすることができた。本稿の成果は微々たるものではあるが、二十年祭に関わる資料を今回紹介できたことで、今後のブラキストン研究の発展に寄与できたとすれば幸甚である。

本稿をまとめるにあたり、市立函館図書館、北海道立文書館、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道開拓記念館の関係各位にご協力いただいた、末筆ではあるが、記して謝意を表したい。

(参考・引用文献)

阿部たつを.1957:「ブラキストン寄贈の鳥類剥製標本」『海峡』34、pp46-47

阿部たつを.1958:「ブレキストン寄贈の鳥類標本」『海峡』39、pp32-33

Thomas W. Blakiston.1883:「Japan in Yezo: a series of papers descriptive of journeys undertaken in the Island of Yezo, at intervals between 1862 and 1882」、In-house reproduction、Originally published: Yokohama: Published at the "Japan Gazette" Office, 1883、"Originally published in the 'Japan Gazette' February to October 1883, and reprinted in this form by request"

平山常太郎.1911:「動物分布上に於ける津軽海峡(フレアキソン氏の経歴)」『理學界』7(11)、pp54-56

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編.2002:『北大植物園資料目録』2、T・W・ブラキストン採集鳥類標本目録

Tetsuo Inukai.1932:「A Brief Biography of Captain Blakiston」『札幌博物学会報』XII、Pt.4、pp256-261

犬飼哲夫.1943:「北海道に於けるブラキストン氏とブラキストン線」『北の風土と動物』、北方文化出版社、pp209-231

犬飼哲夫.1981:「ブラキストン大尉」『採集と飼育』43(5)、pp278-281

犬飼哲夫.1988:「トーマス・ライト・ブラキストン」、木原均、篠遠吉人、磯野直秀監修『近代日本生物学者小伝』平河出版社、pp64-68

加藤克.2003:「ブラキストン標本と絵画資料」『北大植物園研究紀要』3号、pp1-24

加藤克・市川秀雄.2002:「北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入過程とその現状」『北大植物園研究紀要』2号、pp1-24

北島佐一郎.1985:「ブラキストンについて」『こくがん』5、pp10-22

河野常吉.1979:『北海道人名字彙』、北海道出版企画センター

森樊須.1986:「ブラキストンの鳥類コレクション」『北大時報』392、pp25-27

岡田健蔵.1931:『箱館開港史話』、是空会、岡田健蔵が1931年10月に放送した原稿を1946年に刊行したもの
大蔵省編.1885:『開拓使事業報告』、大蔵省

佐藤精編.1957:『斎藤与一郎伝』、斎藤先生伝刊行委員会

札幌南高等学校編集委員会.1975:『八十年史』、札幌南高等学校後援会

市立函館博物館.1979:『函館博物館100年のあゆみ』、市立函館博物館

市立函館博物館.1991:『ブラキストンと函館』、ブラキストン没後100年企画展展示資料目録、市立函館博物館

市立函館図書館.1935:『函館郷土史料目録: 函館開港記念回顧展覧會出陳』、市立函館博物館

L. Stejneger.1892:「Captain Thomas Wright Blakiston」『Auk』9(1)、pp75-76

高倉新一郎.1979:「北海道人名字彙について」『北海道人名字彙』、北海道出版企画センター、pp3-7

高倉新一郎・関秀志・笹木義友・門崎充昭.1886:「幕末維新期における欧米科学技術の摂取について—福士成豊を中心に—」『北海道開拓記念館研究年報』14、pp45-68

Yoshimaro Yamashina, Tetsuo Inukai and Buko Natori.1932:「A List of Birds' Skins by Captain BLAKISTON in the University Museum of Natural History of Sapporo with a Brief Account of His Life in Hokkaido」『札幌博物学会報』XII、Pt.4、pp215-261

谷津直秀.1908:「北海道の鳥学」『動物学雑誌』20(240)、雑録、p40

彌永芳子.1979:「トーマス・W・ブラキストン伝」『蝦夷地の中の日本』、八木書店、東京、pp445-617

¹ 正式名称は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。

² 年代により、函館仮博物場、函館博物場など名称が変更されているが、本稿では函館博物場として表記を統一することとする。

³ 彌永第12章注10、p617。

⁴ 市立函館図書館資料番号 0008581235004。

- ⁵ 『北海タイムス』1911年2月連載記事。
- ⁶ 『函毎』1911年8月9日付記事に「會衆にはブ氏二十年記念會出陳遺物目錄を配布したり」とある。
- ⁷ 『函毎』1911年8月8日号に写真がある。ただし、この目錄に掲載された「7月27日」という記述は正確なものではなく、「3月27日」が正確なものである。
- ⁸ ただし、修正された論文名も厳密に言えば正確なものではない。
- ⁹ 平山の札幌中学校在任期間は1912年12月まで(札幌南高等学校編集委員会 1975)で、犬飼との接点は見出せない。
- ¹⁰ 高倉(1979)。
- ¹¹ 内容確認に際しては、北大附属図書館北方資料室データベース画像を利用した。
- ¹² 『北海新報』、1911年8月10日、ただし原資料は未確認である。
- ¹³ 『函毎』1911年8月8日付「學者の眼に映せるブ氏の面影」。
- ¹⁴ 実際は『Auk』誌の「Note and News」に掲載された死亡記事である。
- ¹⁵ 旧稿の段階で本書簡の存在を見落としていたために、犬飼の記述の根拠を明らかとできなかったことについては、誤りを認めなければならない。
- ¹⁶ 関ら(1990)、「函館仮博物館陳列品」一覧表、函館支庁勸業係「第五期報告書原稿」(北海道立文書館所蔵簿書 4015)、「函館仮博物館陳列品」一覧表、『開拓使事業報告』に基づく。
- ¹⁷ 『Japan Directory』1892および1893。この点については市立函館図書館の教示による。
- ¹⁸ この点につき、福士成豊関連資料調査を行い、福士家所蔵資料についても調査を行った高倉ら(1986)も「Japan in Yezo」は函館図書館本を利用したといい、現在福士家には所蔵されていない模様である。この点については、北海道開拓記念館笹木氏、山田氏の教示による。
- ¹⁹ この目錄には、記載文献の所蔵先を示す「北大」などといった記述がある。文字の特徴から犬飼によるものと考えられる。
- ²⁰ 「開拓使函館支庁民事課勸業係 願伺届録 明治十四年ヨリ十五年三月函館県エ引継迄ノ分属之」北海道立文書館所蔵簿書 4767。
- ²¹ ここで留意しておくべきこととして、分散先から北海道師範学校という情報が失われた根源は犬飼哲夫ではなかったということである。もちろん、犬飼が目錄作成・小伝執筆時に標本ラベルを精査し、また谷津の報告(1908)を確認していれば、その後の混乱はなかったかもしれない。しかし、標本がまとめられて間もない1910年ごろには平山や二十年祭にかかわる新聞記事などの共通理解として、分散先は函館中学校、札幌中学校、札幌農学校となっていたのであって、犬飼が小伝を執筆するころまでには通説となっていたのである。犬飼が小伝をまとめなかったとしても、おそらく分散先はこの三機関とされたことであろう。平山の原稿を受け取り、二十年祭に参加した八田三郎が、谷津に伝えたように「北海道師範学校」からもまとめたことについて触れていればこの混乱は避けられたのかもしれない。

(補記)

本稿脱稿後、北大植物園博物館所蔵ガラス乾板の中に、山階・犬飼らによる標本目錄に掲載されている標本写真の原板が存在することに気付いた。犬飼資料中の他のプリントの原板も残されている可能性もあるが、現時点で確認できていない。